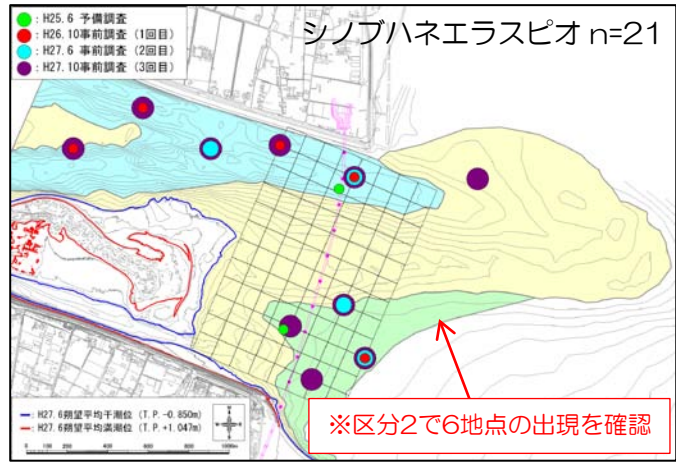
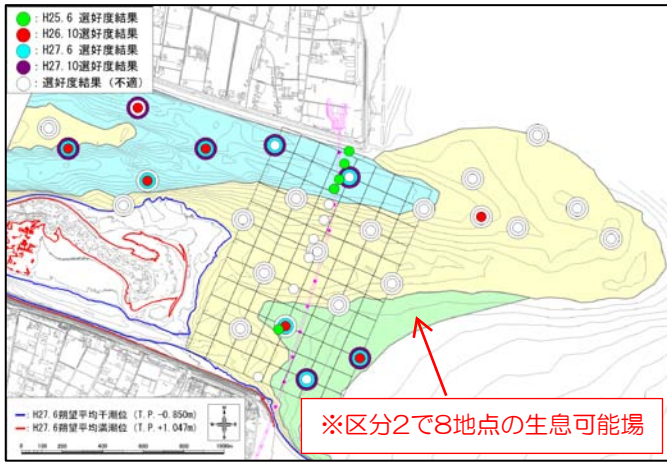
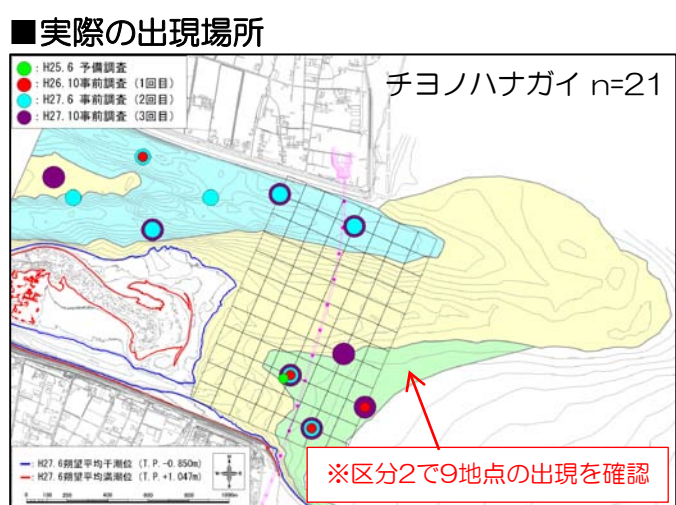
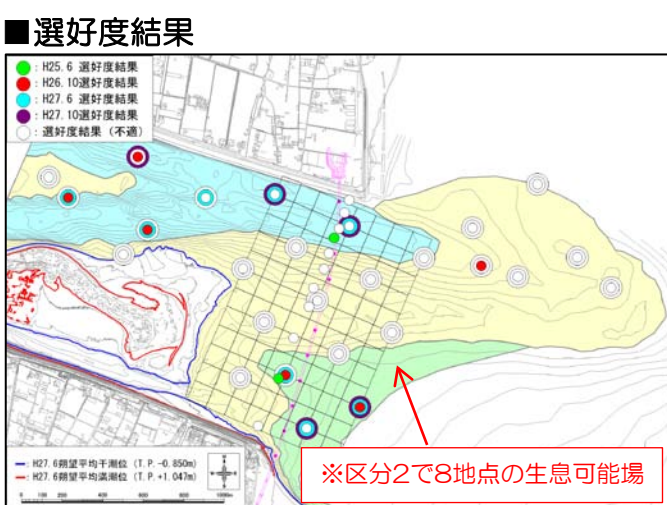
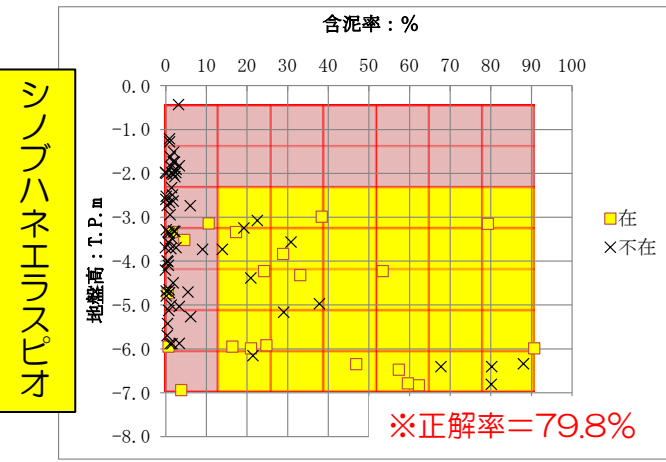
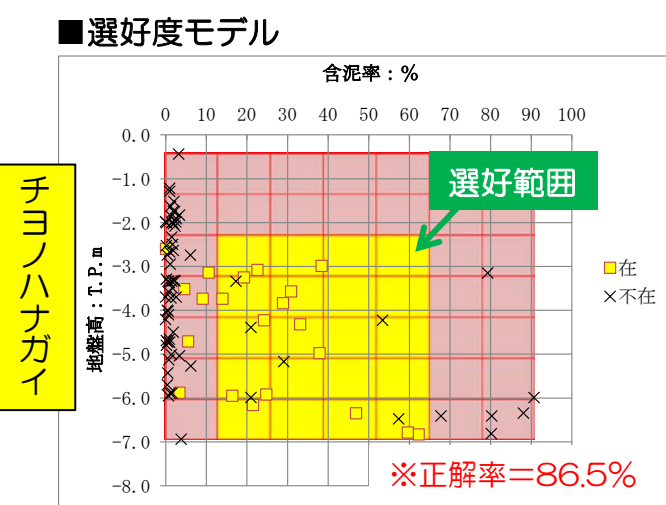


■底生動物のハビタット区分の検討① ～ハビタット区分2の指標種のモデル化～



チヨノハナガイは区分2で9地点確認されたことに対し8地点が生息可能場と評価し、シノブハネエラスピオは6地点確認されたことに対し8地点が生息可能場と評価された。



チヨノハナガイ : 地盤高：T.P.-6.9m～-2.3m、含泥率：13.0%～64.8%、感度：71.4%、特異度：91.2%、正解率：86.5%
 シノブハネエラスピオ : 地盤高：T.P.-6.9m～-2.3m、含泥率：13.0%～90.7%、感度：71.4%、特異度：82.4%、正解率：79.8%

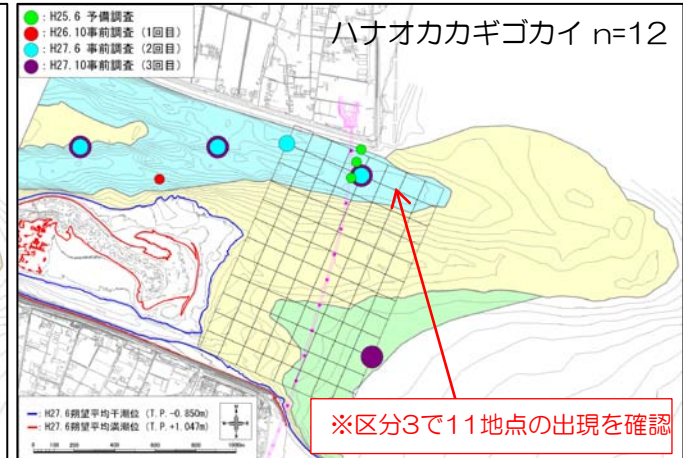
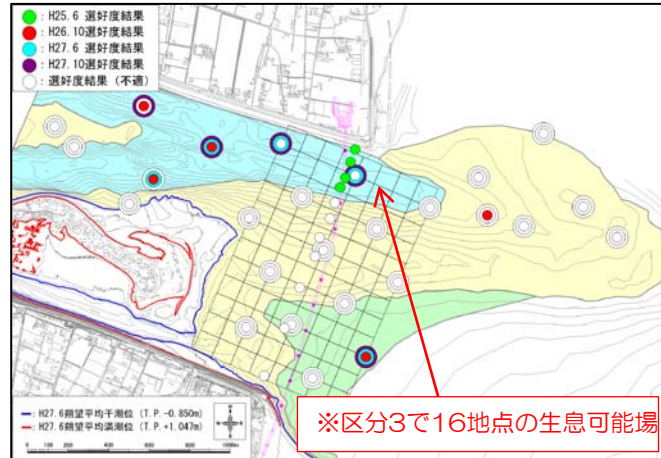
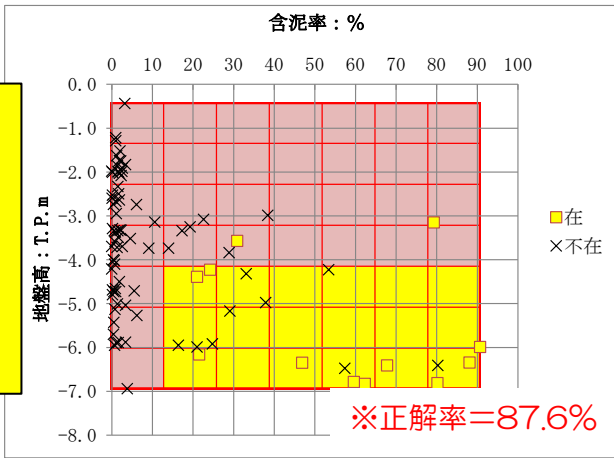


■底生動物のハビタット区分の検討⑫ ～ハビタット区分3の指標種のモデル化～

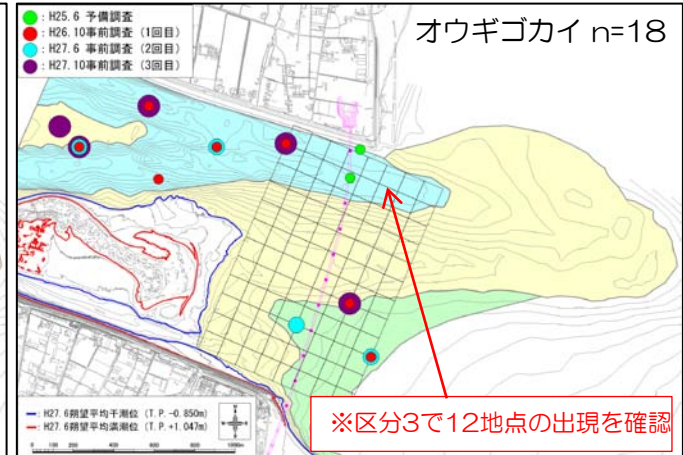
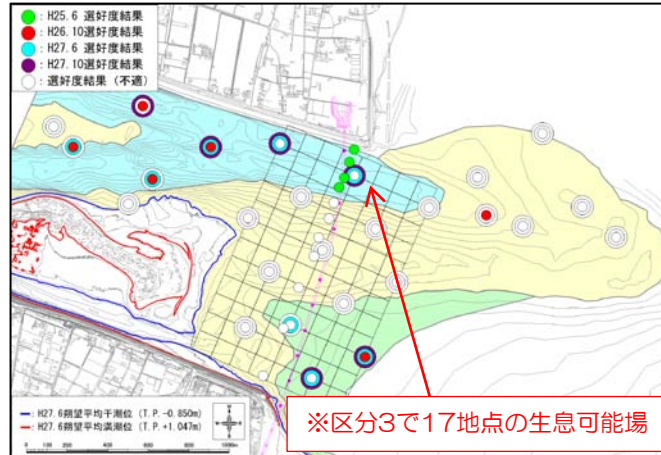
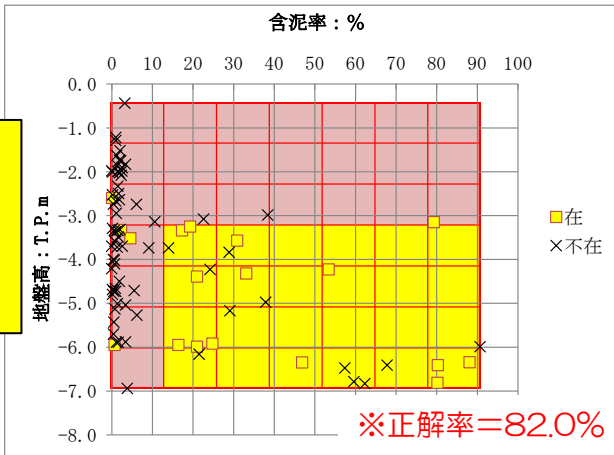


ハビタット区分3についても区分2と同様にモデル化した。
ハナオカカギゴカイは、区分3で11地点確認されたことに対し16地点で生息が可能と評価され、オウギゴカイは12地点確認されたことに対し17地点で生息が可能と評価された。

ハナオカカギゴカイ



オウギゴカイ



ハナオカカギゴカイ：地盤高：T.P.-6.9m～-4.2m、含泥率：13.0%～90.7%、感度：83.3%、特異度：88.3%、正解率：87.6%
 オウギゴカイ：地盤高：T.P.-6.9m～-3.2m、含泥率：13.0%～90.7%、感度：72.2%、特異度：84.5%、正解率：82.0%

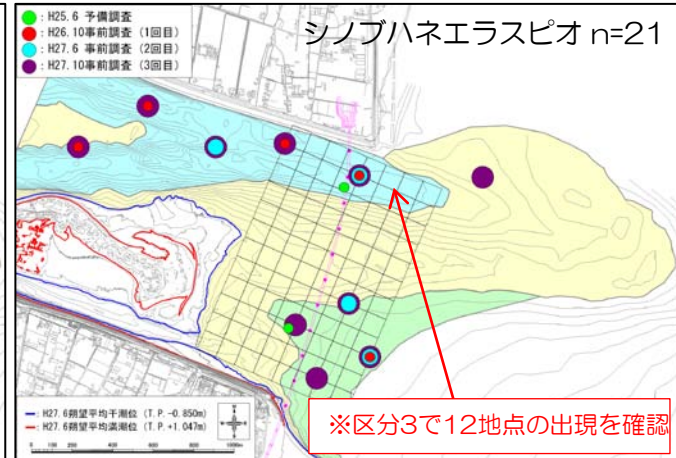
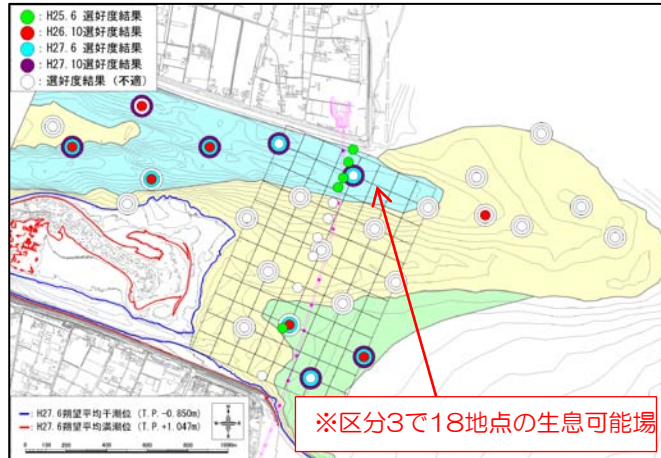
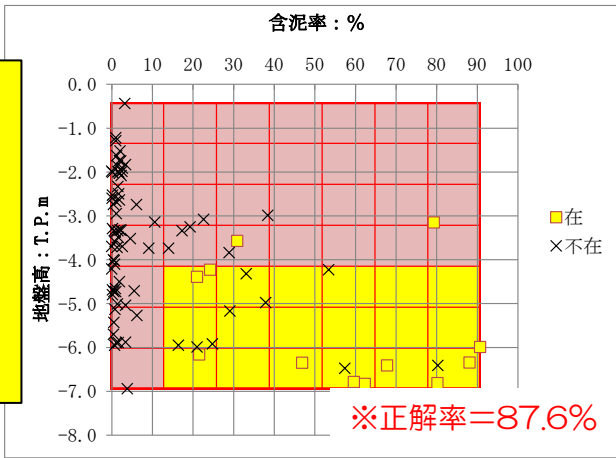


■底生動物のハビタット区分の検討⑬ ～ハビタット区分3の指標種のモデル化～

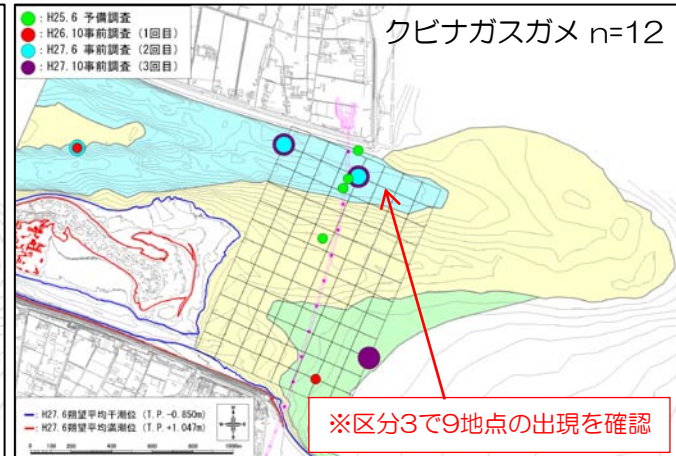
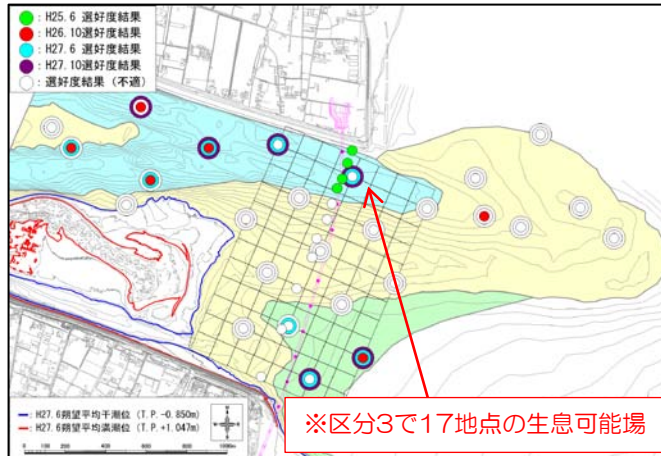
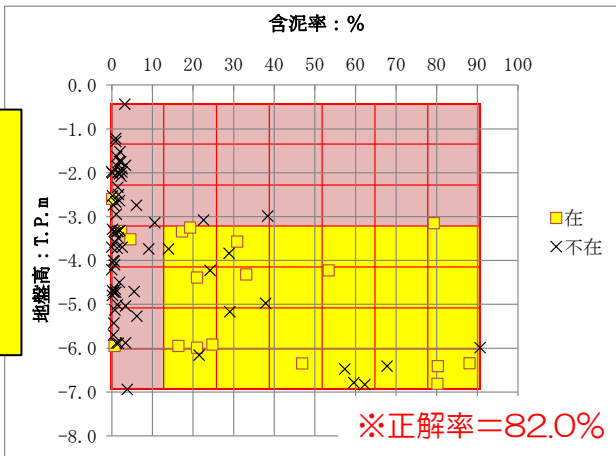


シノブハネエラスピオは、区分3で12地点確認されたことに対し18地点で生息が可能と評価され、クビナガスガイは9地点確認されたことに対し17地点で生息が可能と評価された。

シノブハネエラスピオ



クビナガスガイ



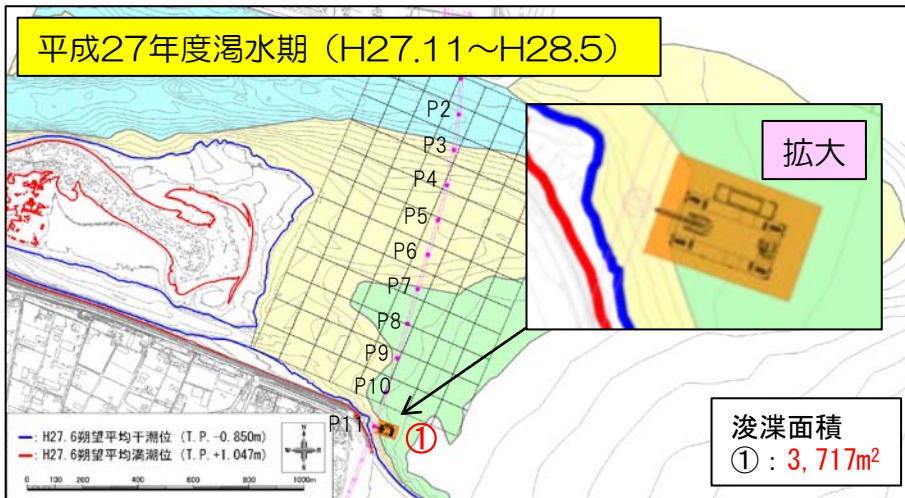
ハナオカカゴカイ：地盤高：T.P. -6.9m～-4.2m、含泥率：13.0%～90.7%、感度：83.3%、特異度：88.3%、正解率：87.6%
オウゴカイ：地盤高：T.P. -6.9m～-3.2m、含泥率：13.0%～90.7%、感度：72.2%、特異度：84.5%、正解率：82.0%



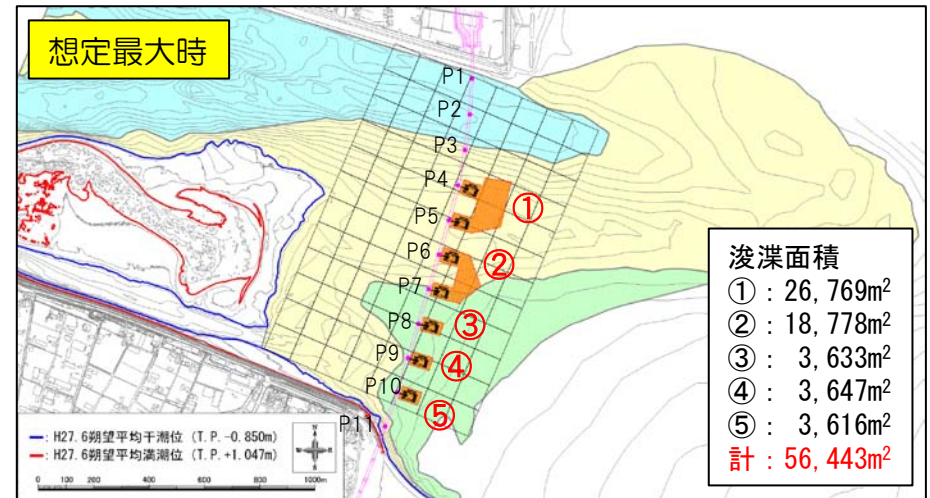
■底生動物のハビタット区分の検討⑭ ～浚渫範囲の確認～



浚渫の影響を評価する前に、平成27年6月の地形図に基づく浚渫範囲を以下に示す。
 浚渫範囲は平成27年度濁水期(H27.11～H28.5)に**3,717m²**、想定最大時は**56,443m²**になることが確認された。



平成27年度は、P11橋脚を対象に
3,717m²になることが予想される。



想定最大時は、P4～P10橋脚を対象に
56,443m²になることが予想される。

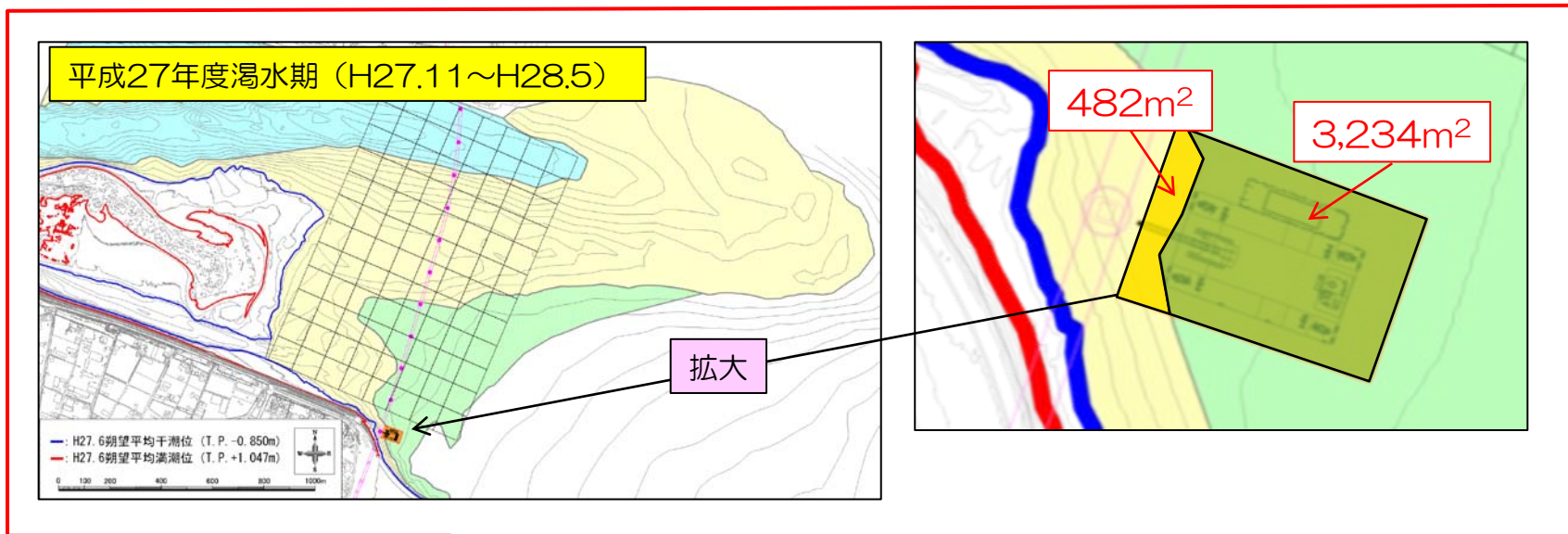
■底生動物のハビタット区分の検討⑮ ～各ハビタット区分に対する浚渫の影響評価～



次に、前述の浚渫面積をハビタット区分別に抽出し、各ハビタットに占める割合を算定した結果を以下に示す。

- ①いずれの工期でも**区分3**に対して浚渫が生じない。
- ②平成27年6月の地形に対して平成27年度濁水期がハビタット**区分1**に対して**0.03%**、**区分2**に対して**0.91%**になることが確認された。
- ③想定最大時が、ハビタット**区分1**に対して**2.49%**、**区分2**に対して**4.31%**の浚渫範囲になることが確認された。

例：ハビタット区分に対する平成27年度濁水期の浚渫範囲



区分	ハビタット面積 (㎡)	平成27年度濁水期		想定最大時	
		浚渫面積 (㎡)	割合	浚渫面積 (㎡)	割合
区分1	1,676,618	482	0.03%	41,056	2.45%
区分2	356,979	3,234	0.91%	15,388	4.31%
区分3	737,731	0	0.00%	0	0.00%
合計	-	3,717	-	56,443	-